



^ 13
1186
2



15
1186
2

門へ 13
1186
2

想山若圃奇集巻の式

目録

- 一 呂川千體荒神尊靈験の事
- 一 猫のその云ふ事
- 一 海嶺界天とふとある事
- 一 山標の事
- 一 風り創より大木自修と記ある事
- 一 別技舟出とたふ事
- 一 鎌鼬の事
- 一 馬の幽魂砂りて嘶く事
- 一 辨方天契りと叶へる事
- 一 附夜遠地産の事

藏書氏

目録

一 藤原より髪乃毛の生つゝ事
 一 神佛の靈験の事
 一 車に曳きつゝ煙家の事
 事

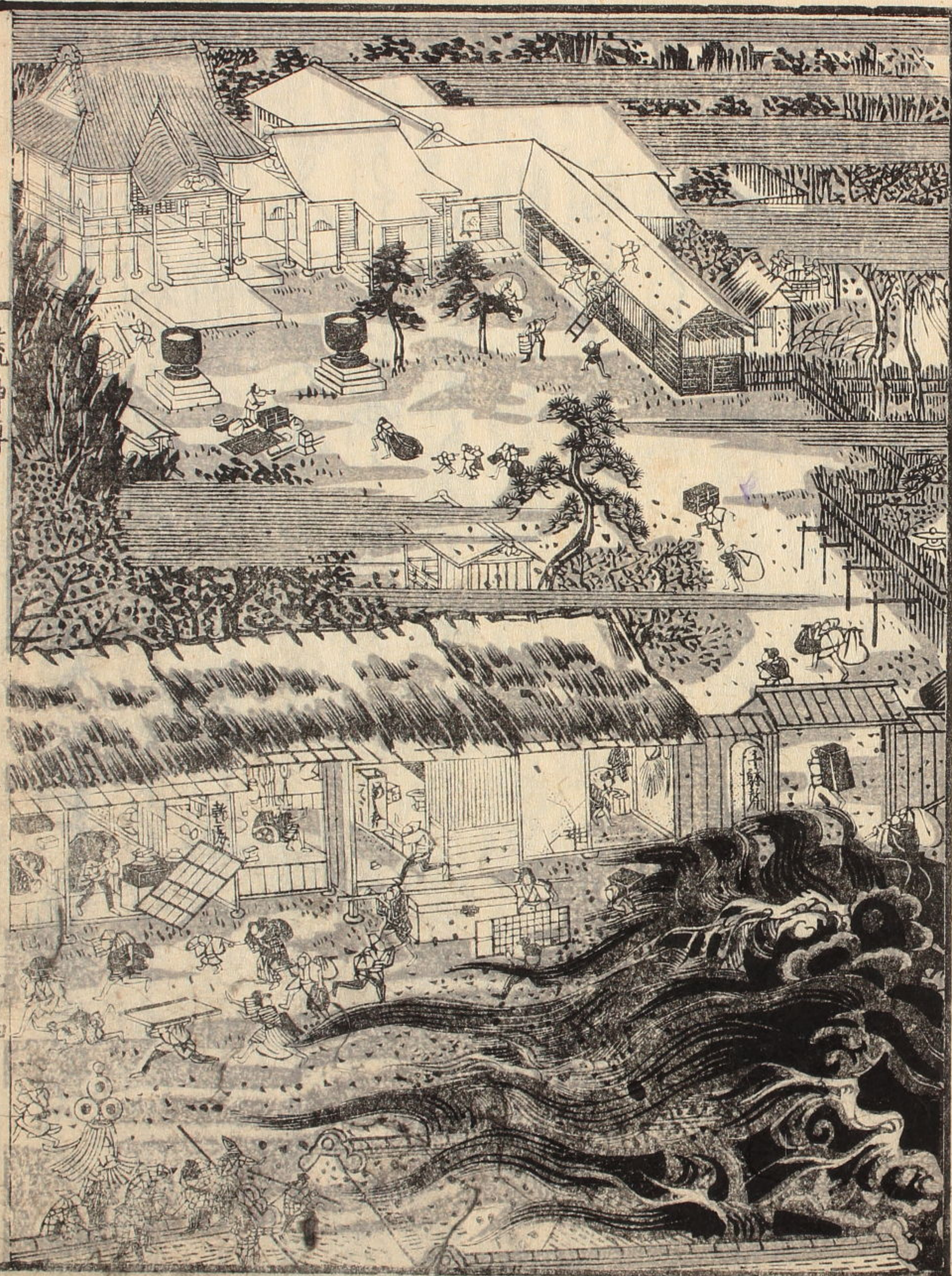
島川白祥美神宮靈験の事

文化二年正月廿九日南島川妙國寺門前より出火
 北風烈々観音前乃武藏屋全座之斬をり云大乗を
 忽に焼く島川寺の連の南村田屋云乗を焼く跡あり
 其後文政四年正月十日北島川の藤田屋云後庵を
 出火々々い時も風烈々々尾月十條町焼板前の乗をくも
 焼く事と云村田屋の北隣信濃屋云乗を南焼跡あり
 又云其後未年正月十二日田乃古川町より出火のと云
 北風烈々少々西と更り々悪風砂石と云一火も亦々
 移々忽島川の観音前を焼板あり

此火ハ豆のハツキ時比ヨ出火
 島川町色部ノ焼板ハ此古川町
 色部ノ焼板故ク移リテ古川町ノ方
 所々東ノ方ニ移リ今目ノ元日而亦例跡ありやけり梅ノ海邊より一帯ノ行脚ノ事
 所々東ノ方ニ移リ今目ノ元日而亦例跡ありやけり梅ノ海邊より一帯ノ行脚ノ事
 此を多ク海ノ邊ニ移リ今目ノ元日而亦例跡ありやけり梅ノ海邊より一帯ノ行脚ノ事

焼止りたるも風強り故に肉より風協南の方北川幸名の中荒火焼く事あり
南の方やけ廻り御青石の東陽末屋全座三軒をホとて焼失ぬこの三軒を幸名焼く事
今も遺座程たる末屋よりとて廻家とて焼く事あり海防逆風焼く事ありこの
大事火元より八二里の上十餘丁狂焼より烈風故跡の外に遺座ありとて此色に
く焼く事あり此時とてまゝ彼村田屋の跡よりかゝりたる火より
免れし事あり何ぞ故に幸名焼く事あり不審と思へ或時余
河原(幸名)の海よりい村田屋(幸名)酒食し此家の
夜に焼ざる事と評し改り出づるか女に母の擧
ごと志名集の故事主の逢く母ぬを思ふ事あり
たかく後家ありとて故類とての後家とて何ぞ
神傳ありも伝作ありとて又幸名の母の焼れり
多を或る寶物靈物ありとて母や何ぞ家の焼ざる
を母の事とてやとて母の事とて金昆雁秋葉
指折さまの類と神傳と傳も此の伝作あり後摩

法新禱の法れも口座しとては法落や中極の列り
心ありもゆりもむをたきとて靈物靈寶ありとて
とてあやうきとて伝作ありに酒音ありとて居るよは後家
出せしむる松とての焼く事あり思ふ事あり要とて
連震の海雲寺の子神意神極の御堂の棟のよは炭乳極の
箱より大燃座りし是は如何なる事とて大事の出来しとて
見らうちり忽西の方より大風吹来りは火の燃座る
箱の海雲寺の門の方へ飛降り燃せし故に村田屋の
前地の町家のうちあり是はとて驚き記す事あり未
存生の事ありとて大事なりとていへとて後家と記す事
松之森床とは幸名とて史も目と賞し何事やとて中極
何事ありとて今荒神極の法屋根より隣の屋根へ



南島川観音前火災の圖
 は當ハ天保二年
 同六年あだり
 火事の時なり
 天保二年の
 大津波は別々
 千餘萬神宮
 の堂の前より
 又一門の明
 寺外は神宮
 のわきには
 備へはが
 根子登り
 居たり



遊々此寺へ系詣うして海報ふととあるなるよりえ来ふ
る神ハ昆首羯磨天の正作 御丈き 法前之ハ飢渴障得の二神
ゆて運慶法慶の作 中余より格別ハ靈神あるもハハ多めて靈
驗ハ炳然ハ丸うるとも事之相は昔縁ハ往昔北後ハ國天系
那ハゆりくとも所と荒神ノ原と云傳へくとも昔ハ靈驗
新ありしと寛永年中肥前天竺二探訪りし時因國連地蔵ノ
祖先末幼君ハありしと云ども出馬ノ刻泳けける祥ハ新形
ありしハ荒神高ハ惡魔降伏ノ神之日もは度乃出陣り
必勝と諸軍ハ抽ぐ誠忠と未代ハ輝かきむりくハ水く
る縁と舟渡一供養ハちるべしと祈誓ありしありし
別靈愈新より諸人ハ勝まるとも参るとも得あひて遊に
一家ノ祖と成るハ益信作淡くともと東都高輪二本橋ノ

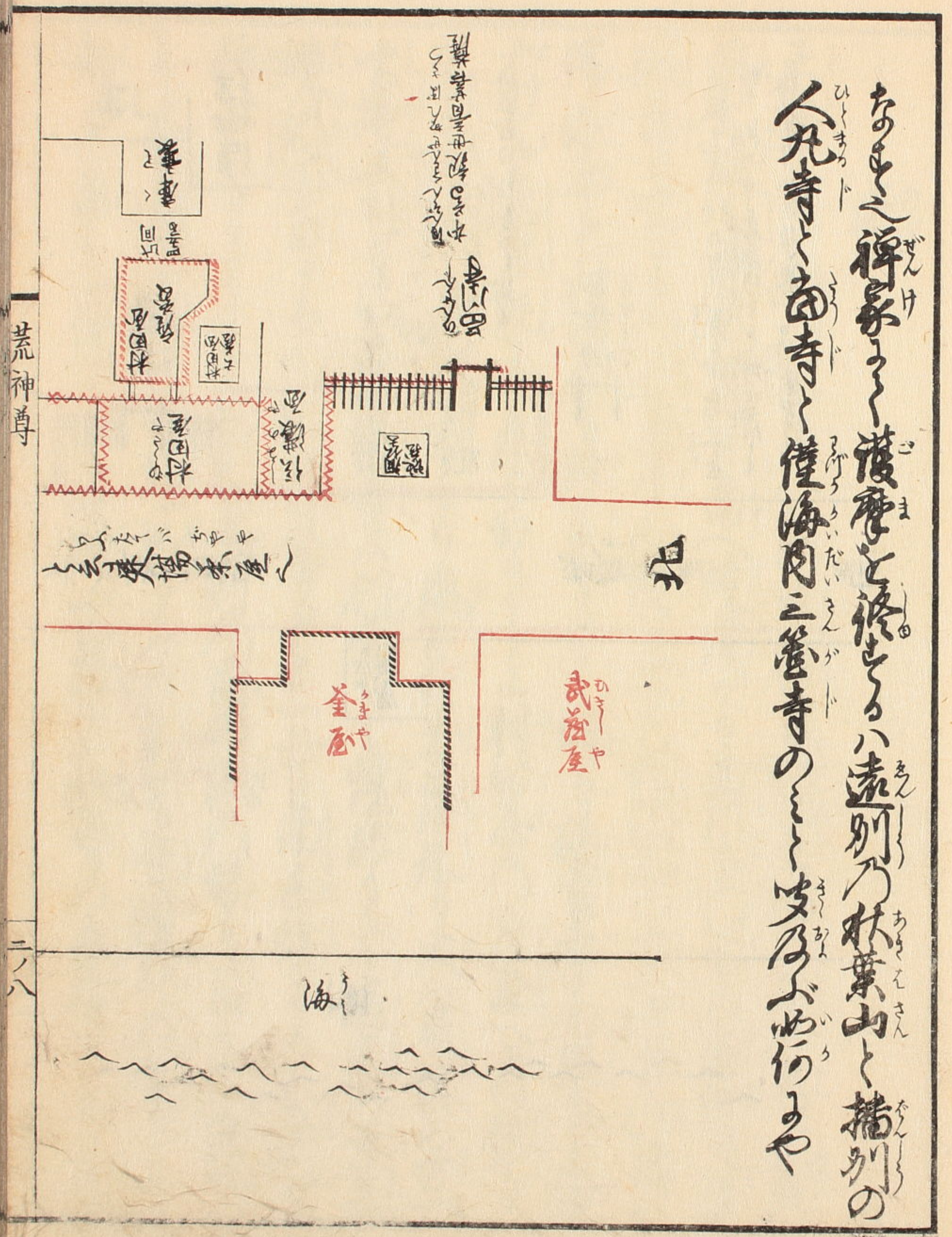
列在ハ遷座たさめ給ひしと天明年中海雲寺ハ世祖下
和尚在位ノ時因縁多々當寺ハ遷座たさめりて後を
貴賤とも来くと運不輩多々法々靈験と日々新ハ
武門ノ族ハ惡魔降伏障得退散のこりりり
昇進發達ノ事と祈願するに朝日ノ昇るが如く奇瑞と
得く佐作ノ族多々又高人の頭と爲儀繁昌と祈ふ
篤ハねは夜むるがごとく利生と成る事炳然と出ると
運不者とも多々古今之ハ靈作るとバたともと事
我ハ始メ村田屋ノ靈験と云くありしハ靈氣とせふ
心願とたるともと後と云くも霊神と云く物々事
たるとハ結縁のこハ儀慶とも供ト夜旦儀慶ノ所
遊るのめさきも神ノ厨子ハ入ると無く史傳ハ一龜

中更く家内ノ守護神とてそのまじやと案内とナリ
折立位階を隣寺へ移りてそのまじやの宿をゆりゆり
疎ゆる本酒つる下男まじやの宿をゆりゆりは昔神乃靈無ハ
つらに同(む)下男まじやの顔さるるまじやハ何れも
能く不思議の弄端ハつらとまじやハ事よハ危ハと云
物まじや何ぞ眼前よりまじやのまじやと見たりやと同(む)
は同(む)漸く夜乃明流る頃庫裏より燈と焚火をまじや
婦人まじや来りてつらに神田の灯つらまじやの妻の由所も
夜も明りゆりまじやも下ハ護摩と換ひつらとまじや
この遠方と何故祈願のゆりゆり今頃来りまじや
ふやと同(む)は昔神乃靈無の靈験とみく昨夜火の
災難とまじやハ事のまじやハ未夜と流りゆり

とてまじやハ事よ付く用のまじやハ松まじやハ神
集りつらとまじやハ松の靈験とまじやハつらと
同(む)昨夜家内皆く静寂りて後要宿もまじやハ
方まじやハ竹つらとまじやハつらと相者閑えゆりまじやハ
目とまじやハつらとまじやハつらとまじやハつらと
神を若や盗賊つらとまじやハつらと見たり
ゆり電乃例の板板もえ指し脱り出火は及ぶんと
ゆり驚天つらと早くお消く事故なつらとお涙ハハ外
時ハ大消盡(火)と入まじやハつらと事とまじやハつらと
火消つらと消盡素焼るまじやハ板板(火)後つらと
消盡つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと
とよまじやハつらとつらとつらとつらとつらとつらと

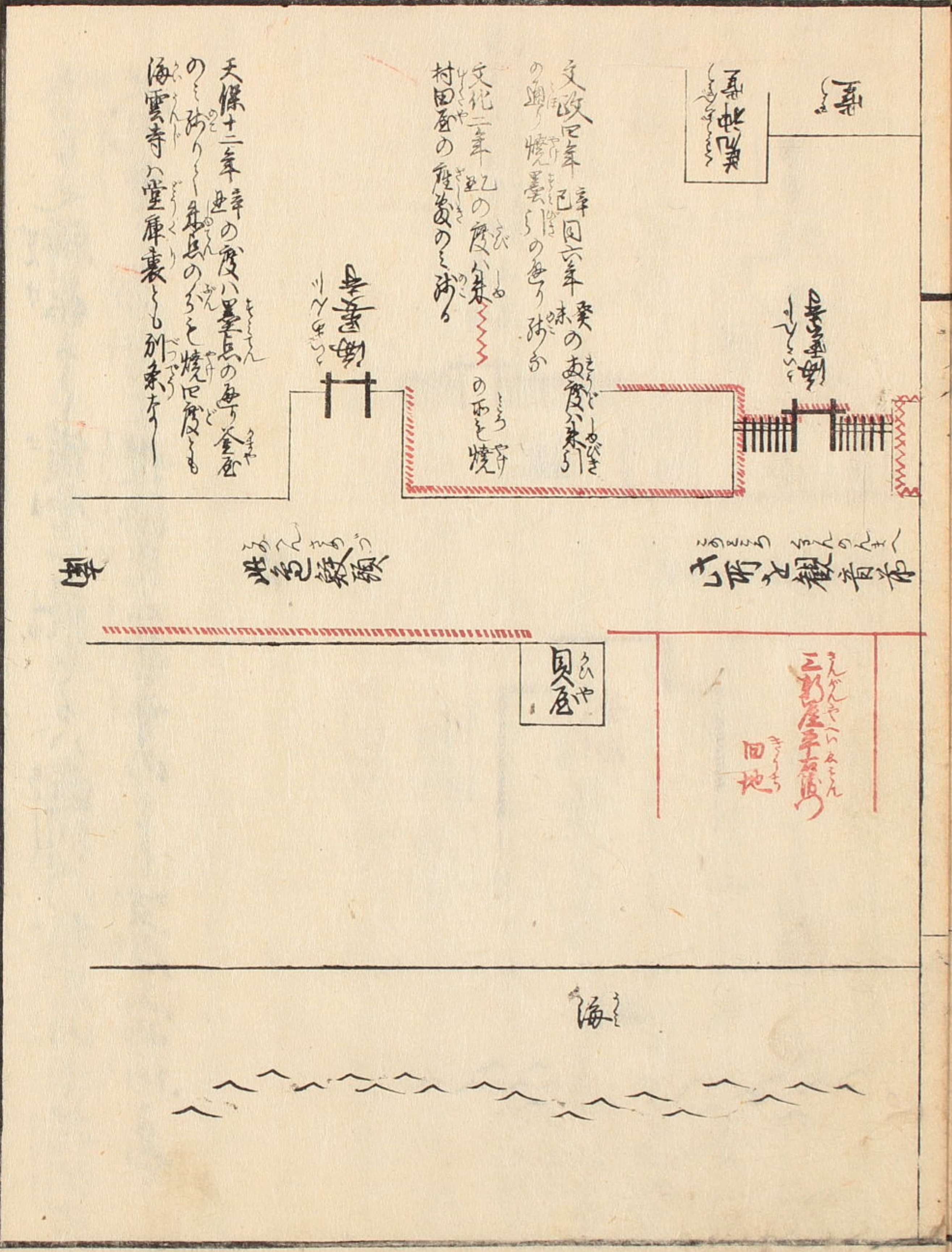
落しひつる者めくまが藤耳は作山りつりえ響く目と
 竟一めかみ液りる難ら幸よのこく感候と流しはれ
 糸のりやゆき音ふ平再びは弄持と支上六最早も余の
 靈験と支振るる切も也も少のうもく流く感伏
 ちり甘り臨む祈願ととも利益と候り一事少なる
 のもくおけき像と子祥意神言くもあるよる流況よ
 子祥雙眼りおとまじバ所度り油額固成もく三幸一の
 ろく笑りり主故のや又前よりハ渡摩の庚とい道させ
 子祥教ふあよるひり田名もや皆分別の利益と施も
 以迄近年竹葉漢中るも号く信仰とたのき幸ふらな
 くも意思の靈像のこりまも也
 此寺の祥意もまもて天宮兜座の渡摩と終くと祈禱とも

ちのて祥家く渡摩と終るハ遠別乃林葉山と掃別の
 人丸寺のあ寺の僅海内ニ堂寺のこ支るふあ何も



荒神尊

二八



天保十二年 辛酉の度 墨江の海雲寺の
のありし 墨江の村田屋の座敷も
海雲寺の堂扉裏にも別あり

文政四年 辛酉の年 墨江の海雲寺の
のありし 墨江の村田屋の座敷も
文化二年 丑の度 墨江の海雲寺の
村田屋の座敷のありし

再世

寺堂

寺堂

貝屋

三軒屋

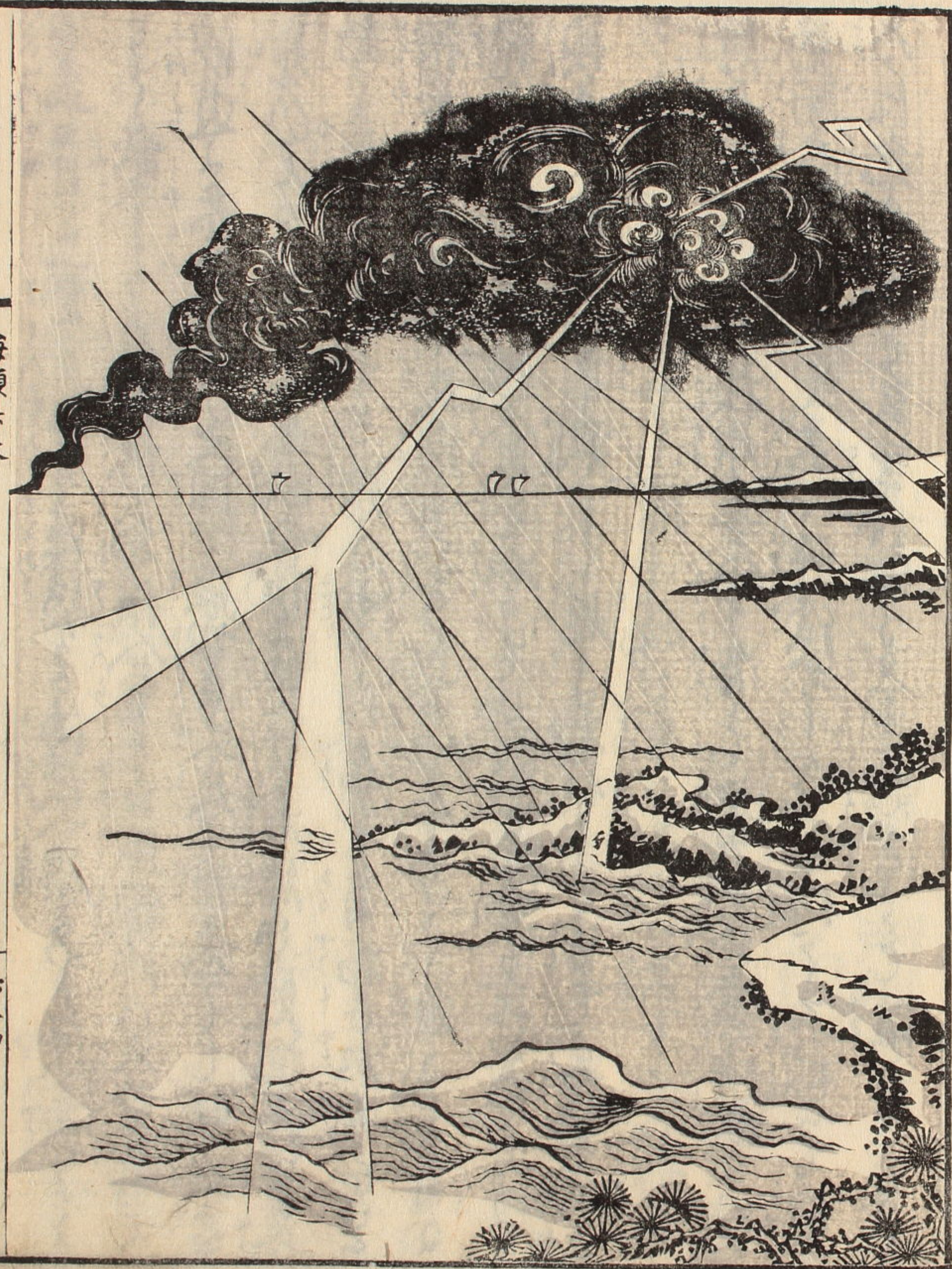
海

追加

天保十二年 辛酉の月 八日の早朝より 同座場の南の邊に炎
風を強く忽ち四五丁南に焼廣がり 墨江の村田屋の座敷も
風を吹くより 武蔵屋の焼く火炎 墨江の方 吹付は度
信濃屋も村田屋も焼失つり 其時 海雲寺と風下と成
火の子吹付脱り 危うなり 村田屋の座敷へ火移り
する頃 俄に乾の方より 風をげ 炎落来り 火は皆其の方へ
吹拂ふなり 又海雲寺の別堂も 焼失つり 遠南の方へ
焼移は 炎の向例に 貝屋も 三丁南を焼くを 人も
防ぎあがり 一軒の内の 風の勢り 自ら 意氣
り 蓋の 一軒 焼失つり 是も 寺堂の 座敷
知と 南も 四度と 強風吹落し 寺の 自燃して 焼

あり 多くの海岸に降るたる雲止山と云ふ入る遊びたる御り
海上俄に黒雲を生じ須臾の海面は掩ひ襲り暴風
吹發り海水と卷上げち舟と舟一暴雨車軸と流し山海
一度の鳴動一物凄まじくせんくま一遊士と稱と止の
側より十羅刹女の掌に入りて雨と避け海とと眺るに何ん
知む海の中と云ふはうつと昇天する者やあうく雲間よ
火焔ひらめき其一文書のあつと云ふ鳴り来る者やあう
ゆき奇怪なりは時同僚の云ふハ野の草ハけきの海に
あつと云ふうく年経る海嶺のなまじ業といハ中傳も
誰と艦成事と知たる者やうく如行成天魔のもせよ
斯様愛物のは方と云ふありと見物一て居ハ橋一うら
似く武士たる者の本意は恨む赤丸を云間音へ云

勿論の事之我あは樂ハ多ハお成むべしと云ふ夫比のうらまは
うらに所侍の眼赤ハ赤まじく何ん雲まはる襲り掃り
怪物の形ハ見えどあつと云ふ被焔する火焔と目あは
其るひき丁種とあつと云ふ火焔の方とあつと云ふはうらまは
火焔ハ雲中よりあつと云ふ風を猛烈一とれぬを云ふ
赤旗とる事と心得る心と云ふあつと云ふはうらまは
又海を静まり勿論火焔ハうらまは消あつと云ふ雲と云ふ
吹拂ハ夕陽海面と照し一と時と七ツりの成りて何ん
具と云ふ遊成建皆と云ふを云ふたりと云ふ又云ふり
回國北浦と云ふ所の橋代官舟ハ海へ入るハ十里程も向る
沖中又何んともん分難と云ふはうらまは海歌浮漂ハ居る
とい出る放城下へ巨浪を云ふうらまは風況を云ふ居るうらまは



中五百目は一里も程有遠漬たる海濱（改）よつと漂着せし
とて一城下より目付役と他役人等も古状攝作ハ大勢惣て
汐道は未だと信ハ大綱と張切も又丈は用意して他松を
頼ひひらるるよき分死歎の極は目ゆるお能く見極るに討め
頼り居る目もさきと物さかハもさき者松子れ死ふと
待居るに丈の又遠きこまハ遠きこまハ遠きこまハ遠きこまハ
究りて周く役人あも加りて目分なからにわのもの
頼りよ惣勇全き歎の極毛部と生て又ハ主人茶を
わく背通りの黒く漬く後ハわく唐田茶よ緒大
惣長と七回三天横中九人半有る會は松安海歎るれハ
見物大勢集りて多々評談せしるも何と云歎よ何の
るに死たりと云事ハ志しきほど歎きても誰らとわく

先所渭海嶺改（一）と鑑定なり彌國中は評判甚しく是ハ
彼間も作り見使なりなるにいふも何人のやとさく
風雲と起し遊遊界天とするの老海嶺と云傍も此の
歎少やたぐいさる故勇思ひ合もさき着ハ先自我すもの
た人うとさ由と役人ハひらき一色一冷凍もさき惣勇ハ
断の飛をさし程う改見るまたの目ハお費するがやき究む
細く指と入目金ハ僅海さ守極入るのくく狭むの
ゆきおは実あるく金ハい前よさぬものさきさき
のく仕事具は主君の極は甚しきさき者ハ極く
亦取らるものなきハ者入下さるべしとて車二載と
のく城下を引死先皮を剥く目くるよき下よゆく強
たふをさし極細のくくさきさきさきさきさきさきさきさきさき

さつとと云り

周りに奥羽平泉の昔奥羽二州の太守法守府將軍秀衡
又祖三代后白河の地より秀衡清衡の中尊寺建立の時分
基衡と佛法より厚儀一佛立運慶として丈六の像
及び三神並其他佛像若干と造りしめんして運慶
使者とを賜りおと其品

- 一金 百支 一警將 百尾
 - 一七間中経之水豹皮 六十枚
 - 一安達絹 千匹 一希綿細布 貳千端
 - 一糠部駿馬 千匹 一白布 千端
 - 一信支文字摺 千端
- 形世外より奥羽の産物珍奇と云りしめんして運慶に賜り

との事南郷が東遊記に見たりは水豹の基衡の所

より記しあるものも其頃奥羽の海は斯のとき
大木豹の所より今も今もいへば今もいへば
渡来のみよや振夷は水豹海獺と云り澤山は居る
この事ハ述べて及びたり物と云はの如く七間より
及びる大木豹の今もいへば今もいへば
物に基衡の六十枚得たり事と云は今もいへば
澤山より居る事と云は水豹と海獺とハ別におもは
檀頭ハ同ト事の根り及びるなり

山標の事

深山より男と云ふものありて世ハ所と云傳つる
事と云ふ事事の記しる書を彼是と云り

いづれもまきまきや又ハ僕一友人もく山と巡り歩けり
量り難し山魁本窟もぐと目種めや何れもせし源山ハ
大いなる人許とありてそのものもたお遠く我 國君の
御領本窟の山奥ハ入居居る本窟甘竹の下役あぐハその
足跡を折ていりる事と追て歩けり是謂ゆる巨人の足跡
と云ふものもや 非と云ふハ大足跡也訓字と歩垂一漢去ふと大なる足跡也
有て其人ハいづる人もあまもて是と巨人の跡と云ふまきり
大足跡の事ハ世との 平ガ竹馬の友在川竹東先年本窟方より
まきまきり 年深山ハ入居居時山男の草鞋と云傳り也の
捨あふと二夜見たり藁のくはうの皮のくく遠く
あふく好愛ふり今あぐバ拾ひ来り人よもじんをりきた
着きさぬゆゑ心ゆく見捨来りハ強念との事と云大さ
佛是 長きニ
尺中 ふたさきのゆく堂一うるづき袖りりん傳りと

いりえ来り振の雨は恒じその山や年来山入のくは
きふ者の中傳りてあぐま飛え容易ハんをぬ者あぐ
其頂 文化の本より文政
のまじりの事なり 本窟山の目玉山 御嶽山の南のく福徳
よりハ七八里程のくたり
濁川云研めく見ハ是く山男は疑ひく事の
うハ玉籠村松人金兵衛と云者金持元氣と勇果も
我腹を強く大膽者く常く他の松人よりハ朝を早く
出ふ事くくま白く明六時比は松道具と脊負て本窟
り行くく只き人元小屋より出 元小屋ハ本と伐後源山ハ小屋と
無け役人と御松木出法所と云ふ事なり
深山ハ其所中りきりて後の方めく大行うてく可る松
音響きくる故振出りてこれを後響のくま姿のそのおま
是のく迹出く道途を永遠ハ一谷向いの谷へりて漸
氣を怪よ成たまきと跡恐らま振の響らぐ出て中

目白く大い通例
 の茶碗の巴り福と
 あるる極目交面群ハ
 腐赤く見え見え身
 熱病ハ黒く見える



是ハ藤行と
 云々行り
 一面
 別々
 泉源
 少く先年
 あり芥子
 中芥子
 二重竹の
 丈ハ八九尺
 程つより
 一丈位の者
 とあり

あび本代の場所へは登りて何れも早く元小屋へゆりて
 顔の形もあま面白く小屋の体もなれ居合する者一回
 不着しと決て後尋りて雨前記する類と異り
 活り知角氣分勝る意の連り山の傍と類しゆえ
 海へあし形斗りあぐりて山の傍と類しゆえ
 見せ故に後家一並ぬ不歌なる男の形と類しゆえ

山男の事ハ諸書よきあり有近ハ水鏡并後園遊亭侯
 北城雷潜大の記一者ども一板のりどもその目
 弄候るる豊前の中津領の奥山は住む山男ハ北城
 雷潜の有泉沼那の山中より出る山男ハ其類
 能似り同く様状も思ひぬきぬき其類

山男ハ又別種ト云々ヤマトノコトより深山の奇蹟フシ云々イ

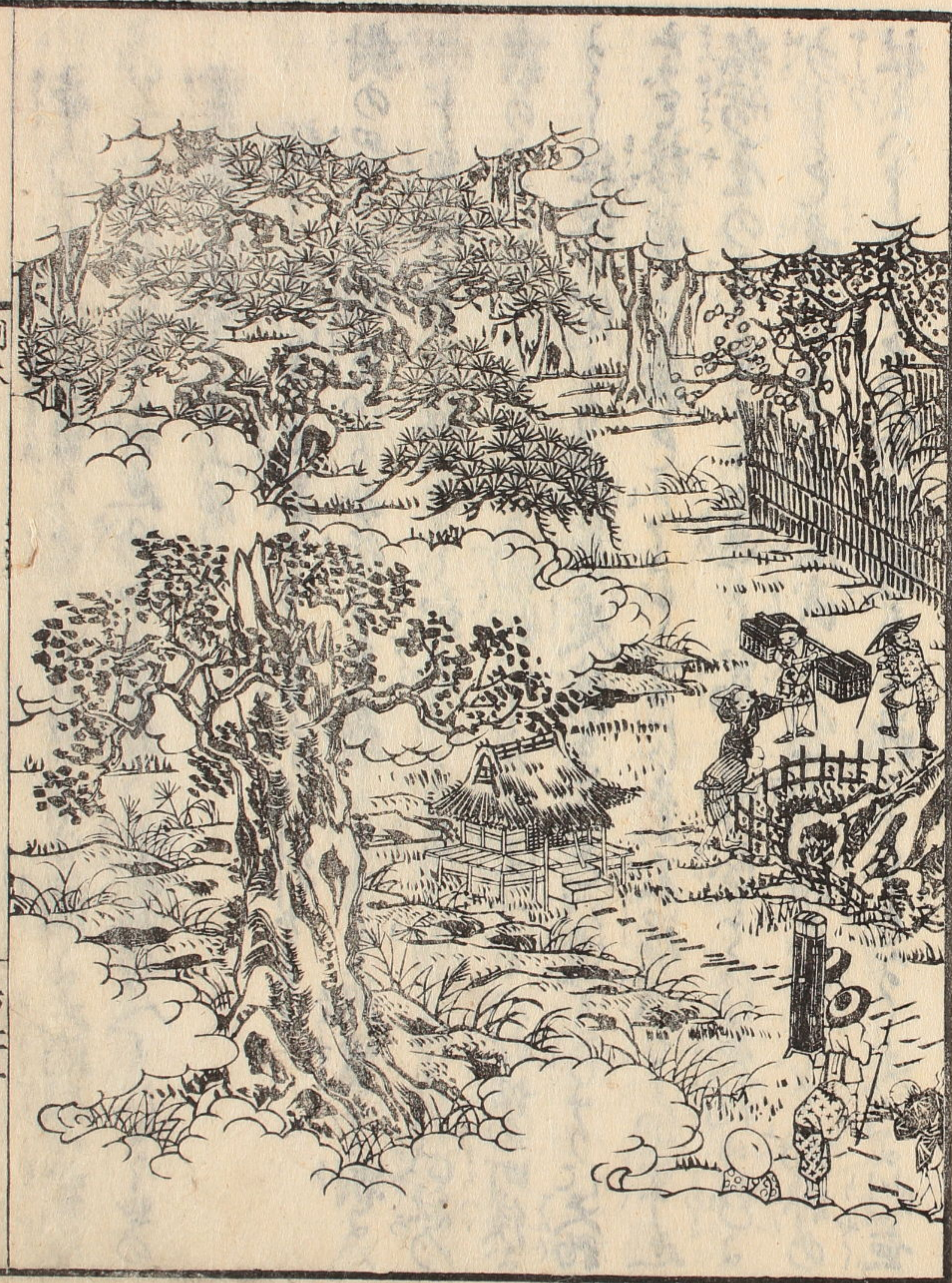
水ミヅ

風に倒たかき一い大本自然ぜんと記おぼする事

伊勢の國松坂の入口いたり倒たかは松崎まつざきと云建揚けんやう素すをある
茶屋ちやの側わきより細尾ほそおと七八十歩入いりあり又また間ま四よ面めんの
社地しゃちり小祠こほら有あり去人こ福林ふくりんの社しゃと云は祠ほらの例れいは標むらの樹じゆ一いち株くわ
河かり此こ樹じゆ天保八年てんぽうはちねん西八月十四日にしの大風おほいぜきは諸國大風外しよこくおほいぜき尾列おしりを
根ねと云いふ諸國大風外しよこくおほいぜき尾列おしりを隣となりりの家いへへ御ご意い怒どりて家をかし
傾かたむきこり里人りじん集あつりて津波つなみと云は樹じゆハ林りん本ほんと云傳つたへ
する本ほんのまはは修しゆりもああるままと人ひとと集あつりて家をかし
祀まつりおのおバなるまといふあへると樹じゆより一いち樹じゆ一夜いちやの中なかは
自然ぜんと元もとのおと記述しゆりたるハ隣となりり不思ふし波なみ成なり事ことと

人ひとと云いふあへると樹じゆより一いち樹じゆ一夜いちやの中なかは
みみと云いふあへると樹じゆより一いち樹じゆ一夜いちやの中なかは
枯かれり枝葉えはのあらたかく大木おほい一いち株くわと又また國くに徑ぢやうの松まつ一いち株くわ
件けんの標むらと云いふあへると樹じゆより一いち樹じゆ一夜いちやの中なかは
ままのあらたかく物ものと云いふあへると樹じゆより一いち樹じゆ一夜いちやの中なかは
るる祠ほら有あり右のあらたかくは標むらの樹じゆ有あり行と云い
河かと云いふあへると樹じゆより一いち樹じゆ一夜いちやの中なかは
柞せ此こ大おほ福ふく後ごと云いふあへると樹じゆより一いち樹じゆ一夜いちやの中なかは
御ご林りんと云いふあへると樹じゆより一いち樹じゆ一夜いちやの中なかは
風ふう雨う甚しんと云いふあへると樹じゆより一いち樹じゆ一夜いちやの中なかは
ををと云いふあへると樹じゆより一いち樹じゆ一夜いちやの中なかは
隣となりのあらたかく何なに事こともなしと云いふあへると樹じゆより一いち樹じゆ一夜いちやの中なかは

倒木



三十二



直筆寫



同所字行被と云西の沼田の終なる水舟の場所と云本と
垣高より大なる本は志性吉の創本と云と云村内
その共舟集り堀穿ちたりり村の外長く中丸也
と云業堀記一雜さゆ急二つは切回五目と云堀と堀
物と云り見るに熱長十回余は尺余の丸本と二割又
中と割ぬと云る丸本舟も一葉本の宮を何の
甚と古代のおわり本島八竹と云と院といかり業も
俗眼もと捕と云え枚本屋又と大と云と見せ
穿鑿と云一といづと捕の類といひと云と杉本ゆえ
越よ八見りき難さ由所と余種朽る所と云と堀出
勢と云りよと欠損ト泳形ちと替りありありと云と
誰んくと舟よハお遠う一本の欠枚百年沈中又沈と

ちあり故う濃と云前よりハまご馬と云と云と云と
本日題も居たりと云は場所と云と云二文と大洞の
岩と見ゆら素焼の物数枚堀と堀出と云と素素焼の
小と云と黒焼壺と云と云と物の欠もと云と堀出と云り
後ハと云と割堀の内り者と云と熱次第と云と六歳は成
小見り持を云と云と板竹と云と云と云と云と云と
舟び出と云り一由と云と云と云と云と云と云と云と
堀穿ちと云り一回八日佛像と云と云と云と云と云と
是と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
和吉屋(堂)り堀形と云と云と云と云と云と云と云と
十四日一は村(は)と云と云と云と云と云と云と云と

舟の中は深きものへ書きつる文字のききと悉く
 磨滅しつゝ見えずとて
 彼寺の門前の数段
 きんかゝしとからん漢
 岡をりしハ跡り多
 諸は舟の事と人々同
 博識家と毎の事
 成る二三の今案とり合
 有きと懸願成案の事
 なり何れとせよ形も
 中の人をり長と十二間を
 續とめか楠の木今令り



舟の事なりとて
 有りて中へ深の文
 字に予と見えに舟

世りハ一舟合をきりとも
 一團り一楸二楸とて
 思はる古ハ一舟の木少
 舟を救渡有つとも
 又ハ昔とて舟の舟ハ一舟
 一二艘ハ一舟とて
 古風なる舟ハ一舟の昔
 舟百年は所ハ懼り居る
 推察するも一舟とて
 多ハ舟ハ一舟とて



下りてくるもの本形り今ハ
 此何なりと云元來は舟の
 軸先の所年來水中より
 出居るもどき寺の教法
 形もどきなるも誰者
 見智の者色形お色
 有りて異くも考ふ種
 不審なる舟之只書記
 ねん〜後昆の良統と
 待り〜



舟の形ち本目欠目世當の
 通りも〜少〜とお遠は
 舟の上獨田は〜より三尺程
 去中へ埋り居軸先の〜ハ
 收年來水中の出居るも
 ども教法の所故不審と
 なる者色形〜お色〜りも
 舟惣長三十一間式尺程中の
 徑の廣さ所〜五尺許
 ほど有りて軸先と艦の



外ハ大辨圓^{ほろ}中^{ちゆう}也^や也^や弦^{げん}乃^の
 本^{もと}の厚^{あつ}き^く二^に寸^{すん}深^{ふか}き^くハ^ハ三^{さん}寸^{すん}
 七八^{しちぱち}寸^{すん}の^の一^{いち}尺^{せき}を^をり^り中^{ちゆう}の^の方^{かた}へ
 繰^{くり}込^こむ^む毎^{まい}度^どの^の方^{かた}へ
 一^{いち}尺^{せき}條^{じょう}を^をり^り繰^{くり}込^こむ^むは^はま
 め^め一^{いち}尺^{せき}細^こよ^よ見^みえ^える^るま^まり





背そむ

横よこ長なが七寸

向むか

長なが七寸



鎌鼬の事

世に鎌鼬云々の有関東の鎌鼬北國の鱧鼬西國の人のゆづ時
必も人知れず大抵底出来ぬ血出づ痛をさす
〜逆身影愛血出痛骨髄〜徹〜惣身よせまるや
〜人の痛〜鎌鼬云々事と知れず〜底の甚愛と
血の多〜物と〜驚〜小兒あ〜ハ虫持〜成大人も
驚顛脱指〜病身と成者多〜中〜は死〜
そのも〜り能心成を成〜事也故〜後見〜
わづらりと記さるり
は〜の〜形〜人眼〜見ゆ〜
底は必曲尺のなり〜に身〜鎌の形〜
〜底大〜

深さ五寸下。二三寸に野別大素村〜
云氏とわけ〜ハ内股守福の底〜
膏り〜白〜骨生〜
初底は付時ハ心成〜
見ゆ〜
あり〜切〜
〜ハ風〜
鬼〜
先底初底の付〜
み〜
痛〜
底〜能切〜

は底必人の股膝騰り出果たり多ハ膝口杯はく也
腰よりよまはく幸ハ掃たりいよの案に地と離
く僅一尺餘りにとぞ考考預顔ととけら
あかひ多ハ特びくの幸ぬり又さたぐりもあつハ
皆旋風の吹果時たをまじ旋風よまじ中哉
あはれまふもの前りえつハ大素村よ股とけら
しと云ハ源回の中入居くの幸也

予一年野別大素村り逗留の時強仕り出する十五歳
のり小童の鼻と顔へもくもく底を鎌鼬り似
きよ底也と同一果ハ鎌鼬の底と云童の母親
例は居く世きハ五歳の特向の山子供とら特び
けく特びるにけの如くハ鎌鼬けりハ小鎌鼬

小供の幸故き時ハ顔一面り底と成り鼻実振け
究明ハ預中悉くんん甚思あまのりりひハ
愈に法ハ肉愈合元理り預中とんぬ振り
あしと云りもハ特びくもられるあハ大井川
天意とひけられたるも特びハゆゑなり
中が受るびハ多々素是の者たり荷ハおねなる者
多ハ侍と忽ハと云と受くも特びハ後なるハ
切くもまを操りも切割る魔障の起り印りてハ
人知の及りぬ事とたるとその去形も多ハハ
そのハ口叙ハは思ハるものなり史と判り有記ハあり
あまハありハ行ハ本ハ有侍のまじ侍の徳と
備ぬくとも多ハ考考ハ廣文和奉を

中傳へぞ名古をよ〜ハ隆〜
笠寺もよ〜
天白川おぐ云山門の末を河りは先唱海乃東橋同を
り色ハ地何よも居るふ成地却〜
居るふ〜
近時ハ木曾山中ニモアリミ
事取リ諸國の人よ尋〜
文政の年野別大森村よ
多〜土地の〜
み〜ハ年〜
此大森村ハ三つハ八十村餘の小村ナリ此地ハ日光山の山麓ニ在リ
日光山より遠き處ハ大谷川ヨリ山門ヨリ
按テ〜所ナリ又故澤山ヨリ河ノ土地ナリ

旅宿の〜
尋〜に左根の〜
日光色〜
是皆土地〜
我身目〜
一貫の理〜
は佳ハ世界中〜
不思〜
の佳〜

西
三十三
吉



元尾別七里の者

七里の者、東海道筋に在り、作屋敷の所、用元村、新奉願、うらむらむら者、と勅

水野竹末と云その島田君の正役は、大井川よ出て四用
前と大領も、折良見付君の将も、若身定山へ振舞
と、かゝる、波一場へあり、鞍附鞍とむむの念、かゝる
向へあわとのせり、明子の川、鞍廻り、怒り、大勢、そ
彼者一人と、連は其連巻りのせ、く、波、く、く、音、良、心、は
大車よ、招、入、奉、め、く、あ、ま、め、く、肩、り、連、巻、と、捨、る
ぬ、く、ま、後、地、り、下、く、ま、く、ま、く、ぬ、け、書、ま、よ、彼、者
作、向、り、向、ま、く、良、常、く、く、樹、く、紀、り、ま、く、く、ま、く
面、料、と、見、る、よ、一、面、く、血、流、ま、く、く、預、と、傳、我、く、く、ま、く
驚、く、く、人、の、音、来、り、ま、く、と、お、く、見、る、よ、月、代、の、髪、の、中、無、て
六七寸程の、腰、底、出、来、り、血、の、出、る、ま、く、殊、り、駭、か、ぬ、念

僕我とせ、く、く、に、執、事、と、驚、く、く、け、集、り、く、く、ま、く、皆、く、

豫、也、く、く、く、ま、く、く、一、向、驚、く、け、り、く、く、ま、く、

是、り、甚、き、事、成、奉、の、ま、く、く、は、若、者、最、ま、と、怒、り、居、る、に

差、の、ま、差、面、の、ま、柳、の、底、付、く、預、申、の、ま、斗、り、大、底、出、来

そ、り、右、目、眼、前、り、是、と、見、居、り、連、具、よ、活、り、く、り

是、と、み、く、く、る、時、ハ、風、聲、の、驚、お、く、く、形、ち、る、ま、く、お、の

看、く、よ、ま、思、く、ま、か

又、行、膝、と、怒、く、居、る、か、者、その、以、膝、の、下、と、う、ま、ら、ま、て

底、付、く、か、り、ま、く、ま、く、は、柳、の、ま、ま、り、ま、く、お、り、く、く、ま、く

有、く、ま、ま、り、は、若、者、よ、底、の、付、く、か、く、全、目、目、の、候

か、り

は、怪、物、水、中、と、見、る、の、く、見、く、り、田、代、津、つ、内、み、て、の

幸ありし西成町まゝ西より濁り水き故子供
集り水中と汲りて捨る居るは丹波一徳
と云ふのまゝ知れり十歳計りの右濁り水の中を
は豫よりけらるる又予が知る人松井又市と云
酒り水中より豆の裏より甲とけり想らまは
遊りは底が基成り男まうり
豫池より想らまはる世ハ救十人まうりは底より死
まうりまはる前ハ云々寺より想らまはるのまは又市の
将に商人のまは底ハ大くともまづハ死ぬものこ
又は怪お梅とてまうりものまはるは須江仁若後橋
の裏店ノ者の妻家の内鬼のまは居る豫池生来久

難儀せしと申候は又世各の天王様所まは
婦人便所より虎とまうり志やむ
又斗返板町先組よりまはるものまはる
うらまはると出ると極の下の方ハあまうりは餘程
かけらるるを特々色有御
凡は類の怪と遊るハ又蘇の霊符たる切符新なる
九字十字漢字法ハまはる物ハまはる形家ハ秘法
育て呉るも眼前より奇と形と不思議成候也
又伽婢子續篇に因ハ別の間ハ豫池と怪事
旋風吹具とて屋敷人の男よそのまはる南は股の
切きる物
口ひもまはるも痛くまはるも又血ハかき出

女難草とては名ぬき一夜の月ありあつて
 何もの業もなき一たな旋風の巻く
 高かききくは子有まを名字に交侍ははらへ
 唯信性續ふそのいたしひ高貴のこきりあつて
 かりと見えたり大九は書に有てあまき病ハ
 さまり裂裂り北曲尺ありあつて昔ハ
 の事成し秋今ハ園東もも得ぬ事と昔の中
 西國筋ハ何探り並夜思ふの
 又南路が心雲噴淡ハ依波の園のまらちハ
 との事ありてそ氣の中ハ所大りりききて傷
 此時り金瘡の如く後亦ハ膏葉るど付ハ皆悉
 死ふふり只石葛根一味葉として洗ハ

又其まに捨る時ハ数日ハ愈るも我依波の外科
 本多勇伯余ハ侍り侍り
 右とひく見る時ハ依波なりてハあま拍り見ゆ
 一たよりりて前ハ死する如く満園ハ有奉之
 依波物漢去のそ首を又灌名ハ何成そのやと
 家博藏家ホに尋きて怪あつては旋風ハ本草
 根目啓蒙の虫の如く漢鬼虫と見えありきり
 漢龍の頭と見えたり灌名といふと消く有との
 澤の所ハ全ハ漢龍のりり
 本草個目啓蒙虫部と云く
 漢鬼蟲

うき流るる

馬の幽魂抄りしき嘶く事

美濃の國波牟の西の方よ本見村と云まはしき道一ハ
馬より突治せし後三月七日廿一日月一ハ三日の内ハ
一日ハ血返一連馬と休ませ給ハ凶事者と云傳の事
りし時ハ休ませ給る風俗也御に同村竹素の馬突
治しし七日月一あり一日よき荷物の出来ぬから
主人ハ馬とまゝ居りしと云らり常々怪しき事
馬士安しし三月月一も休ませざりし七日月ハ血返一
ゆえハ馬ハ休ませし下りしと云く獲む主人の云昔
月よき休ませしと云へ眼前よりよき荷のありと云
きし休ませしと云事や者汝ハもまばらせ我ホ

自身に牽引せしりしと云く荷と付しき主人自ら

馬と牽引しし出りぬまじりし園の方へ新道より日野坂と

しき波牟の園ハ波牟の方へ七里程と有は所へ新道よりギバのうけ

成り馬ハ斃たり書紀一並ぬ類馬と云馬の斃死ハ史よりハ

馬の靈魂は地り止りぬかす其後ハ所へ馬と牽引せ

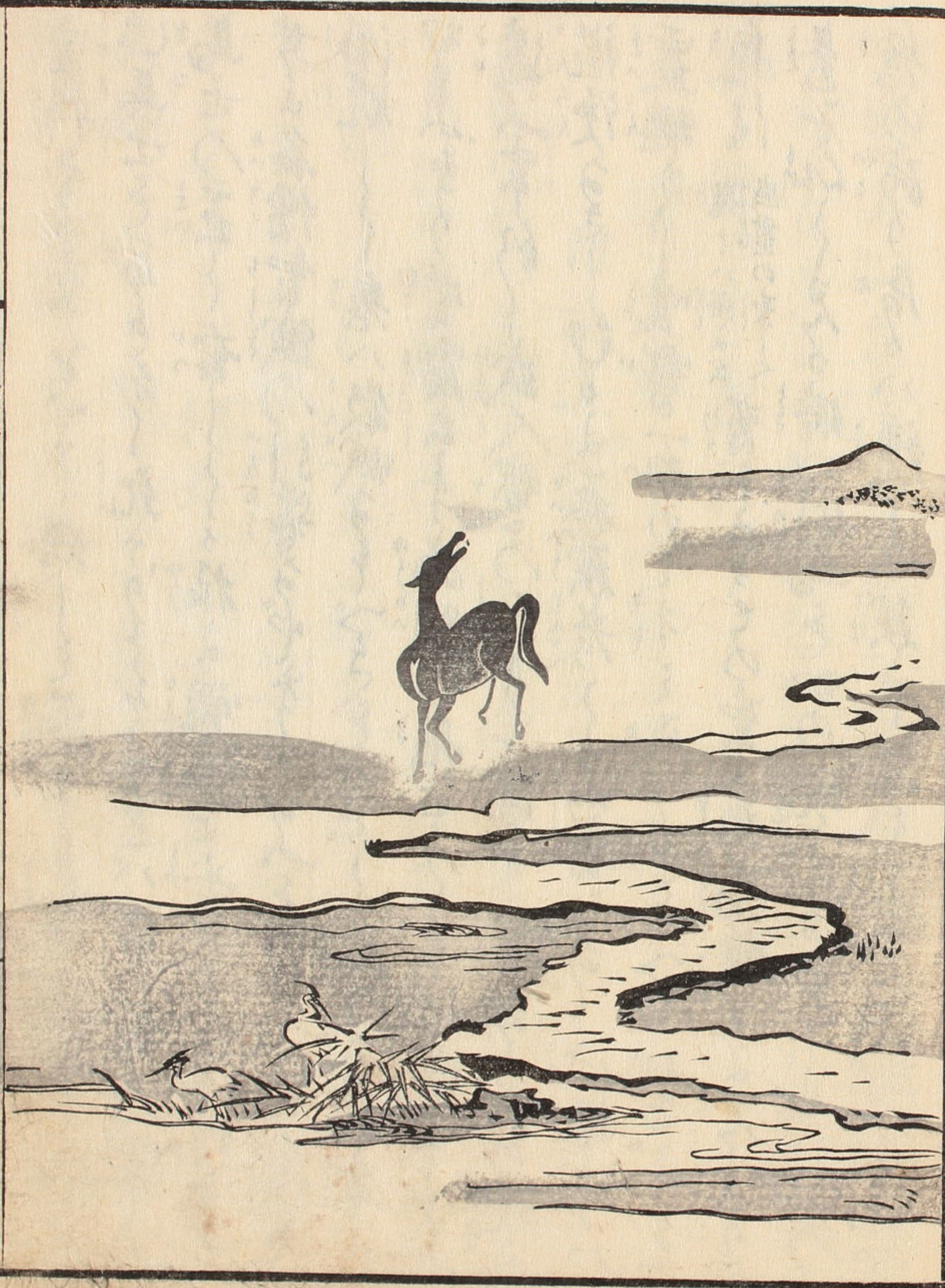
必馬の嘶声はゆきま牽引馬と必馬合事するも何

月り見ゆふそのハか一と嘶く前道より右の方より

むしりの物の中はありしと云く同ハ所より嘶き

又その馬の書文もいれしと云く今ハ此の

馬と牽引ししハ皆現りし事と云り居る事也云云
抱の馬士がは馬と牽引する事大方好しきハ故馬
斃する後ハ甚力と居し主人の血合と云く據りし



事新き事とて一怒一遂一息が病根と成り
馬士とるを死にせしむるは若くは馬の霊と
せよ名僧智識の引導なきを忽ち
得脱し鬼ハ散滅せしむるを残り多き事と
言ふなり昔唐土より幽明の鬼とて見ゆる現るは
遠く事なり或人誓の死を極り理なきの現は
淫淫なきもよみ存考く不審とありは極りハ
靈魂の唯誓一羽のそと居たりとて誓うるを
鬼は幽霊の事なり有るもの事西陽雜俎より
是と云ふる時は馬とかの現りるをハ馬の
鬼の跡り居るハ鏡より照るふかき事ハ馬の斃る

文政四年己卯の事ハ我は是ハ予が方の下男田村志保村
吉松が自刃より地ハ馬を牽き歩けり事と能く居て
是より傳りし事なり
辨々天動の時ハ事
附夜遠地産の事
元田沼家の藩中より後法原より竹葉を世人若く
は江の島辨々天と格別り信作の或事ハの傳へ
兼義しし思ハ松年頃ハの如く信介の
事とて成書客の天女や正真の所安と
きくまらば竹葉先一皮客と相なり夜と
大預と後し頓りに事と念ハ事ハ天女と
新形の切形と物事ありたりや或夜内殿の

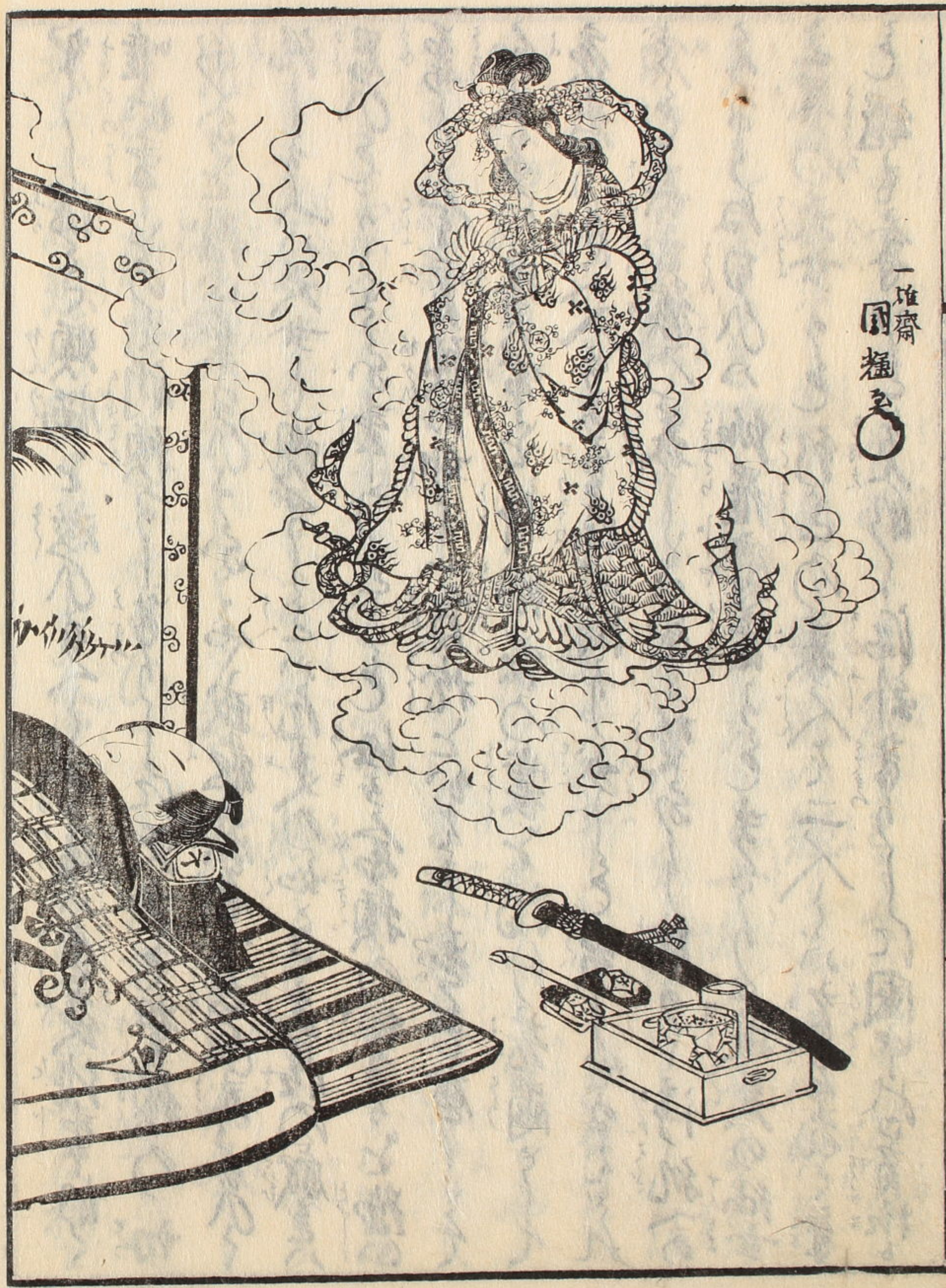
鹿と少一毎と後現さくおまきさせのよま四容貌の
義友の半ハヤととものり寶冠の輝き清衣の更露
見るとまたゆきけはる夜うきと女侍の四奉おまハ
威河をぞと極くすすまきけさつた鹿の色を一
らんく見ゆもせり一に更は天女ハ思ともありむ
背ハ西縁貴妃なるをこわの背さぬのく背一やと
忽ち懸想と後一と更ハ一夜夜息慕ひせりて
急も兼あたるをねまきせすまきけつてハハハの
ゆも急念とと後ともあり燃ハ自事とハ成る
元日が誓願のきくうきかとな役ハ思名納更
多ハ新ねあまきせのゆるハ天女の神通とて
我ハ急想の切なるをとな役ハ思名行率一夜抗と

中ハ深と煩惱と救ひまへと後ハ急夜地事ハ
唯は幸との祈願とせり一に天女と誓願の切
ゆかと恐心兼ひつるかや或夜森屋ハ思ひまき
此ハ天女と現せ一ハハハの如く文情の戯ハ
思ひと一ハハハの事とと後ハ急念の切なるを
兼ハ今宵願の如く一夜抗とかを一と急と急と
心ももに寶冠と解御衣の裳と掲げ荒雨とて
夜着の月ハ入るよま松人回りサと急と急と急と
とと其玉顔の義と急と急と急と急と急と急と
えらるぬ白ハ伽羅舞音とと急と急と急と急と急と
上界の天女とと急との義人ハ二人ハ急と急と急と
と急も急と急と急と急と急と急と急と急と急と



辨
戈天

二
四
十三



一
堆
齋
圓
極
之
〇

竹と人回り 碧のま 竹の如く 竹の如く 情お細 竹の如く
首尾跡のふたつ 世り 杯交大座と 無く 竹の如く 竹の如く
濱ま さまよ 八重の巻 竹の如く 後ハ昔の如く 竹の如く
教忠の 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
流れの 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
罪と 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
暮ひ 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
又 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
お解 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
暮り 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
一ひ 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
おま 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く

余の 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
二度 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
竹の 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
増 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
更 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
今 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
夜 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
我 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
初 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
地 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く
あ 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く 竹の如く

一馬の姿毎と曲岸面白くおひり音声激は妙
 一と交まむを動きまらりあざりけりけり
 となり脚より燈のいさるあつらひついで
 色もりく後霧り友達は事と活るく迷は死
 かりそのまは加茂村く怪又支那りたるの
 育くこの支あふその意り余り慮り友事
 けりと思ひく再夜回返とせせく心く流
 ねと志く一向古く事くくくくくくくく
 支ぎ馬士の名を忘る今思ハバ残念のり活り
 そのまは時ち多ひ一天女ハ改ハ寶冠と頂と
 月に神鏡と澤ひるつど藤枝ハあふも天壽
 の女の衣履と着多へりくく一ハ妖魅執程の

秋くくハ形くく去りく神佛よと和光回養と云事
 河まバ竹とくくくくくくくくくくくく
 十八九才の女種り見くくくくくくく
 岐まの例年正月七日面くくくくくく
 くくくくくくくくくくくくくくくく
 居るハ常く歩行あくくくくくくくく
 事ゆりくたもくく事くくくくくくく
 そのゆり右色くくくくくくくくくく
 全同日の漢地
 又武別入間郡富村 余西のり 乃地産るく靈験新く
 一々を歩くと歩ふ所ハ地産るの事と云信
 夜ハ地産るくくくくくくくくくく
 予は事と云村の長

記と具り記さき一後記中ニ権現と親相の
もとの事ら其文よ云忽然更見一大杉横伏其上直立
其容颜極高貴尊嚴年齡十有七八計無緑髮於背後著白衫赤
袴身向北面向予云是と見る時ハ権現の言より
一と云くも英蘇あり一幸ハ前ハ天女と云く自極
口事と思ひらる根の神々の凡支の祝歌と誦はん
歩毎の種物ハ多し根人同ハハまきりきまきりて
何種書解とも文巻の及ぶ事ハハあつたふり
強々實とまらハハ何れも理地虚実を見ん人の
心りまらさるのまあが世系ハ瀛海ハ壯男に
瀛念を具とまむる書歌ハせよハあつて誠
然んと記せしもの見誤りありあつて

予思入り以来に之明院の秘天と云ハ忍ハ
秘天入り秘と一樂音天のべ一樂音天と
妙喜天と云く一切の喜声の事と好まハ天女之
の申あり記と西ノ秋ノ声と云く西ノ吉祥天女の事也
故り琵琶と云く如阿の如きハ馬士の音声り憶
るハも現るハもハ又秘天ハ障得と持ハ
あハ天女の事と持ハハ秋實と云く日ありハ
存也ハ記と一列女の如く秋實と云く西ノ秋ノ
天と云ハ金光明經の記ハ一列吉祥天同一群也
云ハ是ハ淨教律宗の秘天秘決り瀛海細雲り
一我未也と云く清智と云く海ハ事能ハ
さハ婆と云く實ハ二群と云七秘天

生々有如何なるものか
 坪坂村の本草切着成るの
 所と居合せしを唯好むと申す
 知り難く舊友神田行某彼書と文よそへて先下
 ぬは水野の色ハまづ山中の
 宋薪採所
 少く刈取ら故行を
 伐束りて也かり兼ふ
 此の事也是ハ文政八年配の事たり記
 一並て是書
 備ふ
 又巻別巻序ハ西南一里程隔る所なり
 大西村徳性寺
 と云寺有 同國平地所 右寺の表の方の庭あり
 終計
 の築山有西の諸木ハ其幹其ハ小枝も細く
 然るに白苔の長さ七八寸と有る
 今ハ白髪のみあり
 小枝おどハ高のて
 双方ハ見事なり下と居

たるも多し又生無り
 何ぞと有回ト地徒
 垣一重隔る隣家の雑木ハ更り
 右寺中り
 とも墓所なり又生居る
 本ハハカ一とあり
 諸木と云ハ紅葉漸濁
 柘植わくわく
 又くあま
 づきの本も生居り
 今ハ地氣の強
 一むか
 ともわゆる
 杯交事ゆ念心と
 尚見あり
 一色
 前文ハ先似り
 事ハ石古屋
 鶴堂所
 真慶寺の老僧の物語り
 有り是と
 見ふ時
 一
 う根の
 一
 諸國
 一



と云者よ治りしに日人驚く忽後復と加へ今ハ又
相殿り揚ぐ數百年に傳つる甚くはありぬ其くも
神徳の靈妙恐入る事一は神の靈験の事
廿五の巻よと記しぬ
又是く同法を延國武對邪芝山觀音寺ハ性古ハ
名別の佛國く今も觀音人志の事む靈場めく
本高觀世音菩薩英二王宮ハ靈験新の事奉世に
勝る強ひ是又元人の能知なりけり寺に二層の階次
建てる事一々和元年癸の春の事あり遠近
の男女競く杖木と費集むは時中杖を伐出
救人儀の如くに因縁く聲と出く引あり
きり元來は本ハ天物の借とす申來の首く其の
天物版一々せ一様くは車俄り群集の中を

池出く止まらざり人驚く迎除る事一々同國
高田く云下の金兵衛又子小池々の夜産の母中澤村の
茂助決と云その都合人々を傷とく車とと一割
きり人々を身神悉く粉のく成とくよ又思成や
衣腹の断く破裂く一々身ハ何とて怪事と
何く少一の痛とけり善好く一と也金兵衛や
茂助決もや博多宿の帯とく居り一に帯ハ
引きまありとの事と追く誰く怪り安あり
是ハ江戶赤坂中通りの質屋與兵衛と云者の近の
生息の事あり其時の形勢くあり居る活しと
前の八幡宮の靈験と今も同板く思ひ能く元
一ありは事かの寺の畧録記りと記し何と

今少一幸藤のふ根り思入故具り記一並ぬ且
 縁起より二王尊の擁護もやとほまじき事予ハ観音
 の妙智カとけは事うと思入り
秘傳又亦之也回作の観言より 志うまじき事ハ二王尊ハ怪異奇
二十二年月一及び用麻布の事
 其のふ靈験とあり事少うも程中四の巻も
 は二王尊の靈験の事と記一並ハの巻去幸府の記
 梅不思淡と形も素もといは二王尊の靈験の事記一
 並よりたも色バ二王尊の擁護もや何りとも共よ
 現妙感甚ふと申くはまじき事也

想山著聞奇集卷の式終

